
とある学園の異常者達

風神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園の異常者達

【Nコード】

N28710

【作者名】

風神

【あらすじ】

これは正史から乱れたifの物語。

1人の少年の約束の物語

それは少年の沢山の人々との縁<エニシ>の物語

ここに1つの物語が始まる

一限目 入学

?俺は風神 剣（カゼカミ ツルギ）。

?俺は今日、この学園に入学した。

?箱庭学園

先ず始めに、

?ここには大きく分けて三種類の人間がいる。

?一つ目は、『通常 ノーマル』

?これは読んで字の如く普通の人間だ。

?大概の人間はこれに該当する。

?この箱庭学園でも半数以上はこれだ。

?次に『特例 スペシャル』

?これは天才と呼ばれる人間。

?運動でも学業でも他人より遥かに上回る人間はこれに該当するだろう。

?この箱庭学園ではそういった人間を『特待生 チームトクタイ』として扱う。

?そして、『異常 アブノーマル』

? これは言葉で表せる様なものではない。

? 現象といつてもいいのかもしれない。

? 総合能力ならば特例にも敵わないだろう。

? しかし、それでも、異常なのだ。

? 異常の人間がなにかをすれば必ずそうなる。

? 努力も環境も運も関係なく異常で気持ち悪い結界だけを常に出してしまふ。

? それが異常。

? 異常で異質で異形な存在。

? それが、『異常 アブノーマル』

? そして、もう一つだけあるカテゴリー。

? この存在が何なのかを理解する事は不可能だろう。

? この存在を理解するのは同じ種類の人間ですら不可能だろう。

? その存在は見る事すら普通はありえないだろう。

? それこそが『過負荷 マイナス』

? 世の中に何一つプラスにならない才能であり存在。

? 俺も一度だけ見た事があるが一目見た瞬間、二度と会いたくないと思った。

? 見てはならない存在だと思った。

? この学園にすらない存在。

? たった一人でもたない過負荷を及ぼす存在。

? まあ、今はこの程度の説明で十分だろう。

？とにかく俺はこの過負荷以外の三種類の人間がはびこるこの学園へと足を踏み入れた。

？俺のクラスは一年一組。

？ちなみに、一組から十組が『ノーマル通常』のクラス。

？十一組と十二組が『スペシャル特例』。

？十三組が『アブノーマル異常』のクラスとなっている（まあ、十三組に関しては、三年まで合わせても五人登校していればいい方という程、不登校の奴らが多いそうだがな．．．）。

？とまあ、教室はそんな感じだ。

？俺が学園を見学も兼ねて、各教室を見て回ると妙なクラスがあった。

？三年十三組

？パツと見は誰もいない。

？いる筈がない。

？しかし、クラスを中心に何かを感じる。

？抑え込まれた強大な力の様なもの。

？そして、見えた。

？そこにいたのは高校生か疑う程の巨漢の男。

？そしてわかった。

？俺がこの存在気づけなかったのは、この男が誰もがその存在から目を逸らし忘れたくなるほどの破壊的な強さを持っているからだ。
？力を抑えているのではなく、力を認識できないのだ。

？これがこの学園の『異常 アブノーマル』

？俺は男の前に行く。

？「始めまして、先輩。俺は新入生の風神 剣です」

？男は一瞬こちらを睨むと、

？「ほう。新入生で俺に気づく奴がいたとわな。俺は『日之影 空洞 ヒノカゲ クウドウ』この箱庭学園の第93代生徒会長だ。俺に何かようか？」

？わりと普通に返事をしてくれた。

？「偶々ですよ。ここには偶然通りかかっただけです。日之影会長はここで何を？」

？「別に何もしていないさ」

？生徒会の仕事はいいのか？

？「そうですか。では、私はこれで。また機会があれば会いましょう。日之影会長」

？この人とはまた会う事があるだろう。

？何故かそう確信できた。

？「ああ。俺を覚えていたらまた会おう」

？そして、俺は教室を出た。

？ふう．．．緊張した。

？その瞬間、俺はさっきまで誰と話していたのかを忘れそうになる。

？．．．なんて規格外な異常だ。

？恐らく認識を阻害する様な異常が彼の異常性なのだろう。
アブノーマル

？俺はもう一度教室の中を見るがもう誰もいなかった。

？日之影空洞

？俺はその名を心に刻んだ。

Ⅰ 日之影 S i d e Ⅰ

? 風神 剣か . . .

? 奴は何者だ?

? 通りかかったただで俺に気づくのは不可能だ。

? ? だが新入生が俺がここにいる事を知っている筈がない。

? つまり、奴は少なからず俺の力を感じたという事だ。

? この俺の力を . . .

? ククツ。面白い奴が入って来たな。

? これからこの学園はどうなることやら . . .

? I S i d e O u t Ⅰ

? 俺は自宅のマンションへ帰った。

? 因みに俺は一人暮らしだ。

? 親はいない。

? にしても今日は疲れたな。

? 日之影空洞

? ありゃあ、とんでもない怪物だわ? (俺も人の事を言えた義理がどうか怪しいが . . .)。

? もう一度会って気付ける自身はないなあ。

? むしろ覚えてられるかなあ。

? 俺が会ったどの異常よりも異質だったな、アレは

? まあ、それでも過負荷には敵わないだろうけど。

? 特にアイツには。

? ま、明日から退屈しなさそうだな・・・

? そして、俺は眠りに着いた。

?

?

一限目 入学（後書き）

主人公の見た目書くの忘れてた。

ぶっちゃけ、おれのもう一つの作品の主人公と同じです。

あえていうなら、黒髪蒼眼で、髪型はツンツンした感じで、某カミヤンっぽい感じ。

身長は175cm

最初のほうは主人公最強で行くと思います。

これからよろしく願います。

二限目 生徒会長

？

それからは特にこれといって対した事件もなく生徒会選挙が始まった。

？俺と同じクラスで友人の『人吉善吉』ヒトヨシ センキチは十三組の一人の選挙活動の手伝いをしている。

？毎日クタクタになって愚痴をこぼしているが、それでも手伝うのは彼が人吉善吉その人であるからと言えよう。

？そして、結果発表。

？結果は支持率98パーセントというあり得ない数字を叩き出し、ぶつちぎりで一年生が当選した。

？一年十三組『黒神 めだか（クロカミ メダカ）』

？人吉が応援していた人物であり、完璧超人として学園の有名人でもある彼女。

？彼女の異常は不明。アフノーマル

？文武両道、才色兼備を絵に描いたような人物。

？もはや総合能力ですら特例を遥かに上回る彼女の異常性はとても興味がある。スペシャル

？そして彼女は全校生徒の前で、ありえないような啖呵を切り、生徒会長を就任した。

？彼女を例えるとするならば、天才というより、天災と言った方がいいだろう。

？どんな人物であろうと彼女の近くにいれば影響されてしまう。

？ たった一人だけ影響されなかった人物がいるがな。
？ まあ、その件は後々語って行くでしょう。

？ そんな訳で彼女は生徒会長となった。

？ 「そういえば善吉」

？ 「ん？ 何だ、剣」

？ 「お前、生徒会に入るのか？ 黒神の手伝いしてたし」

？ 「そうそう。あたしも気になってたんだよねー」

？ 「ん？ よ、不知火」

？ 「ういーす、風神」

？ この突然現れた少女は『不知火^{しらぬい} 半袖^{はんそで}』

？ 俺と善吉と同じ一年一組で、箱庭学園理事長の孫だ。
？

？ 「で？ 人吉はどうすんの？ やっぱり生徒会に入るわけ？」

？ 「カツ！ なわけねーだろ！ これ以上あいつに振り回されてたまる
かつての」

？ げっ！？

？ 「・・・ぜ、善吉、後ろ・・・」

？ 「俺は絶対！ 生徒会には入らない！！」

？ ・・・終わったな。

？ 「まあ、そうつれないことを言うものでないぞ善吉よ」

？ 背後に立っていた黒神が善吉の頭を掴む。

？ 「！？」

?「・・・愁傷様」

?

?「ギヤアアアアアア!!!」

?そして善吉は連れて行かれた。

?辺りには善吉の叫びが木霊する。

?そして、放課後

?俺が校舎をブラブラしていると、

?「ん?あれは善吉と黒神?」

?善吉と黒神が一緒に同じ建物に入って行く。

?「あそこは、剣道場だっけか?」

?俺が剣道場をコッソリ覗くとそこでは、

?「何イイイイイ!?!」

?黒神が分身していた。

?まあ、ただの剣道の運足だけだな。

?常人には分身しているようにしか見えないだろうがな。

?俺もやろうと思えばできるけど。

?その後、黒神は剣道部の不良達にメチャクチャな自論をかまして、
善吉諸共ボコっていた。

?もちろん、剣道でだが。

?俺はそのまま帰ろうとするが、

?「もう帰るのか?どうせなら貴様もやっていけばいいだろう?風
神同級生」

?・・気づかれてたか。気配は一応消してたんだけどな。

?「流石ですね、黒神会長。いつから気づいてたんですか?」

?「私達がこの道場に入った辺りから誰かに見られていたのは気づいていた。後は勘だ」

?勘で見破りますか・・・

?こいつも中々の化物ぶりだな。

?「それから、私と貴様は同級生なのだ。そんな敬語を使わなくていい」

?せっかく猫かぶってたのに。

?理由はないけど。

?「それじゃ、遠慮なく」

?「ふん。それで、貴様は何をしに来たのだ?」

?「別に。ただ会長と善吉がここに入って行くのを見たからちよつと覗いただけだよ。それで何してんの?」

?「なあに。目安箱に早速投書があつたのでな。生徒会を実行しているのだ」

?「ああ、あれか。そういえばあつたなそんなものも」

?ちなみに目安箱とは黒神が会長就任の際に学園に設置した物だ。

?24時間365日、誰でも投書でき、誰からの相談も受けつけている。

?「それで一緒にどうだ?剣道は貴様の領分であろう?」

?「いや、遠慮しておくよ。邪魔しちゃ悪いし」

?「それは残念だ。貴様の剣道を見て見たかったのだがな」

?「はは。まあ、そのうちみせるよ」

?「そうか。引き止めて悪かったな。また明日、風神同級生」

?「んじやな。黒神会長、善吉」

?そして、俺は真っ直ぐ家に帰った。

今日も疲れた。

黒神をまじかで見たのは初めてだけど、あれは相当な化物の様なな。

本気の俺と互角くらいの力を秘めてそうだな。

まあ、今の所『日之影元会長』の足元にも及ばないだろうがな。

くくっ、この学園に入ってよかったな。

俺をここまで楽しませてくれるとは。

明日が楽しみだ。

そして俺は眠りに着いた。

三限目 剣の道と書いて剣道と読む

？翌日

？「やつほー、善吉。生きてるかー」

？教室に入ると自分の席で突っ伏した善吉がいた。

？「なんとかな」

？顔を上げた善吉はボロボロだった。

？「黒神に随分しごかれたみたいだな」

？「ああ。お前が残ってたらず少しは違ったかもしれないけどな」

？「ははは。俺までとばっちりを食らうのはごめんだよ」

？「はあく、そりやそうだ」

？善吉が溜息をつく。

？「そんなになっても黒神に着いて行くお前には本当に關心するよ」

？「しゃあねえだろ。あいつは俺の幼なじみなんだからよ」

？それでもそんなになってもまで付き合うのは本当にすごい事だぞ、

善吉？

？異常 アブノーマル ってのは異質な存在だ。

？俺が見てきたアブノーマルは皆、孤独な存在だった。

？誰かといたくてももられない。

？皆、離れて行く。

？そついうモノなのだ。

？でも、善吉はずっと黒神と一緒にいる。

？通常 ノーマル が異常 アブノーマル と一緒に要られるなんてありえないことだ。

？だから、お前は凄いだよ。

？そして、お前は幸せ者だな、黒神めだか。

？「まあ、頑張れよ。俺も出来る範囲でなら協力するからさ」
？「ああ。ありがとう」

？そして、授業も終わり、放課後。

？俺は、剣道部を覗いて見た。

？そこでは、ボロボロになりながらも部活に励む剣道部員達がいた。
？これが黒神に影響された人達。

？全員の目つきが昨日までとはまるで違った。

？俺は、彼らにスポーツドリンクでも差し入れようと近くの自販機
へと向かった。

？俺はスポーツドリンクが入ったペットボトル数本をタワーの如く
積み上げながら片手で運んでいた。

？つたく、学園内の何処の自販機もスポーツドリンクが売り切れと
わ。

？わざわざ学園の端っこの自販機まで行く事になってしまった。

？因みにその距離、約2キロ。

？俺はノンビリと剣道場へと向かった。

？その途中、草むらに何かが見えた気がした。

？俺がその草むら近付くとそこでは、頭から血を出した善吉が倒れ
ていた。

？「善吉！？」

？俺はスポーツドリンクを落とした事も気にせず善吉に駆け寄る。

？「つつ．．．剣か？」

？善吉が目を覚ました。

？「大丈夫か？何があつた？」

？「誰かに後ろから思いつきり後頭部殴られたんだよ」

？「誰かつて誰だよ？」

？「知るかよ。わかるのは木刀みたいな硬い木材で殴られた事くらいだよ」

？「木刀？」

？俺はそれを聞いた瞬間嫌な予感がした。

？「善吉、そこに落としたスポーツドリンク頼む！それからちゃんと保健室に行けよ！」

？「え？つちよ！待てよ、剣！」

？俺は善吉の言葉に振り返る事なく、駆け出した。

I Side 善吉

？「え？つちよ！待てよ、剣！」

？剣はそのまま走り出してしまった。

？「つたく、何なんだよあいつ」

？まあ、多分あいつも俺をやった奴の心当たりはあるんだろうけど。

？「じゃあねえ。俺は保健室に行くか」

？俺は剣にスポーツドリンクを拾おうとそちらに目を向けた。

？そこでは、

？「は？」

？逆さになったペットボトルがタワーの如くそびえ立っていた。

I Side Out

？俺が急いで向かったのは剣道場。

？そこでは、満身創痍の剣道部員と、同級生の日向がいた。

？やはり日向だったか。

？あいつは中学の頃、先生や先輩と馬が合わなくて試合に出られなかったらしい。

？日向は確か剣道では全国区並の腕を持っていたはずだ。

？並の剣道部員では歯が立たないだろう。

？しかし、剣道部員達は立ち上がり日向に向けて啖呵をきる。

？「たった今思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

？「俺も……」

？「俺もだ……」

？「俺なんか日本一の剣士目指してた……気がする」

？はは。始めに見た頃の不良少年は何処へ行ったんだか。

「……うっぜえ！ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ！剣道三倍段って知ってか！？僕はあんたらの三倍強いつて意味だ！！」

？日向が木刀を剣道部員達に降り落とそうとするが、その瞬間、

？日向の手から木刀が消える。

？日向は何が起きたかわかっていない様だ。

？そして、背後にいた俺に気付く。

？そして同時に俺の手に持った物にも気付く。

？「ふ、風神！？なんでここにお前が！？それにその木刀は！？」

？「ん？これか？これはお前からさっき奪った物だけど」

？無刀取り

? 一応剣道の技の一つだ。

? 黒神も使えるらしいが普通は数年の修行が必要だ。

? まあ、あいつは色々規格外だからな。

? 「つたく、さっさと帰れ日向。今帰るなら見逃してやるよ」

? 「なっ!?!この野郎、調子に乗りやがって!」

? 日向が床に落ちていた木刀を拾う。

? 「てめえ、剣道三段をなめんなよ!」

? 日向が木刀を振りかぶる。

? 「忠告はしたからな。どうなっても文句いくなよ?」

? 俺は木刀を構える。

? 日向は剣道三段。

? 中々の実力を持っている事は間違いないだろう。

? しかし、俺は、

? 「お前、剣道十段って知ってるか?」

? そして、戦いは刹那に終わる。

―とある校舎裏―

? 「くそっ!何であんな奴が特待生じゃないんだ!」

? ボロボロになった日向がボヤいていた。

? 「だが、絶対にこのままじゃ済まさねえ!いつかギッタギッタ

ンにしてやるぜ!!」

?日向が復讐を誓っていると、

「まあ、そんなに荒れるものではないぞ?日向同級生」

?いつの間にか黒神がいた。

?お前は忍者か。

「ひつ、ひいっ!!せつ生徒会長!?なになんで?!役員募集はどうしたんだよ!？」

?終わったな、日向...

「問題ない。ちゃんと代理を置いてきた」

?代理?

?代理つて...あつ、不知火ね。

?「なっなんだよ!利用された仕返しでもする気かよ!!」

「利用も何も生徒会のご利用いただくためにある。これから大いに活用してくれてよいぞ。約束したはずだ。私は24時間365日、誰からの相談でも受け付ける。如何なる場合でもその約束に例外はない。貴様に会いにきたのは単なる別件だ」

?すると、黒神は1枚の紙を取り出す。

?「『クラスメイトの日向君の性格が悪そうなので治してあげて』だそうだ」

?「!!しッ、不知火イ!!『悪そうなので』って!!」

?「哀れなことだ」

?突然、黒神はポーズをとりだす。

?「貴様もかつては天使のように純朴な少年だったに決まっている。不幸にも愛情に恵まれなかったが故にそんな独善的な性格になってしまったとしか考えられん」

?すげえ、決めつけだな。

?「ギッ、ギニュー特戦隊!？」

?そこかよ!?

?つてか、よく気付いたな。

?「安心しろ!二度と悪だくみなどできないようこの私が徹底的に

可愛がつてやる!!」

?「ギッ、ギアアアアア!!」

?その後、日向がどうなったのか・・・

?知るモノは誰もいない・・・

?つてのは冗談で、その後日向は剣道部の指導をしているらしい。

?善吉の傷もたいしたことがなかった様でよかった。

?まあ、普通の人間なら入院する様な傷だったけど。

?善吉の傷は直ぐに治り、特に傷も残らなかった。

?腕の良い医者でも知っているのだろうか?

?そつえば、人吉つて言ったら・・・

?でもまさかな。

?でもそれなら納得が行くしな。

?まあ、それは今度本人に聞けばいい事だろう。

?こうして、波乱万丈な生徒会執行部の最初の仕事は終わった・・・

四限目 会長と犬と番犬と

? 剣道部の一件が終わり数日が経った。

? 俺が外をブラブラしていると、

? 「何このカオス？」

? 妙な格好をした黒神、そして善吉と不知火、異常に怯えた狼ばりの大型犬がいた。

? 「ああ、そういう事ね」

? 俺は善吉達の元へ近付く。

? 「よつ。また妙な事になってんなお前ら」

? 「ん？ 剣じゃねえか」

? 俺は犬の方へそつと近付く。

? 犬は一瞬ビクつくが頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細める。

? 黒神が近づけば大概の動物はこうなっちまうだろうな。

? あいつはあまりにも異常すぎる。

? 黒神の方へ目を向ければ黒神はこちらに背を向けた状態で固まっていた。

? その背中はとても寂しそうに見えた

? ．．．仕方ない、やれやれ世話が焼けるやつだ、まったく。

? 俺は犬を抱き上げ黒神に近付く。

? 「お、おい剣!？」

? 「大丈夫だよ」

? 善吉が俺を引き止める。

? まったく、黒神は良い幼馴染を持ったもんだな。

? 「おい、黒神」

? 「!?! 風神同級生、その犬は!？」

? 黒神が驚いた顔をする。

? 「落ち着け。お前がそんなんじゃこいつも怖がつて当たり前だろ
うが」

? 「す、すまん」

? シュンとする黒神。

? 「ほら、撫でてみな。優しくな」

? 「う、うむ」

? 黒神が恐る恐る犬へと手を伸ばす。

? そして、その手が犬へと触れる。

? 犬は俺の腕の中で黒神に撫でられ先程同様気持ち良さそうにする。

? 黒神の顔も自然とほころぶ。

? 「ほい」

? 「うわっ!？」

? 俺は犬を黒神に押し付ける。

? 「俺はもう帰るから。ちゃんとその犬、飼い主の所に返しとけよ」

? 「え? え?」

? 珍しくテンパる黒神。

? こりゃ珍しいもんが見れたな。

? 「それじゃあまた明日」

? 俺はその場を後にした。

? Side 善吉

? 剣は嵐の如く現れ去って行った。

? だがそれ以上に驚いているのはめだかちゃんが抱いている犬だ。

? めだかちゃんが動物に触れている所を俺は初めて見た。

? 全ての動物はめだかちゃんが苦手だ。

? それに例外はない。

? だが、剣が渡したあの犬はおとなしくめだかちゃんに抱かれてい

る。

? やっぱりあいつには何か秘密がある。

? 俺の想像を絶する様な秘密が…

? だが今はあいつに感謝しよう。

? めだかちゃんに笑顔をくれたあいつに…

? それから数十分後、また犬がめだかちゃんに怯え出したのはまた別のお話

? Side OUT

? 後日、俺は善吉からの先日の子の追求を逃れ校舎内をウロウロしていた。

? すると、善吉を見つけた。

? その表情には怒りの様なものが伺えた。

? 善吉があいつの顔をした時は大概、黒神関連の件だろう。

? 俺はこつそりと善吉の後を追う。

? 辿り着いたのは使われていない会議室。

? そこへ入って行く善吉。

? 「何なんだ、一体？」

? 俺がこつそり会議室を覗くと、中には数人の男子生徒。

? その中には会長選挙で女子生徒を脅して票を集めていた生徒もいた。

? まあ、黒神にこてんぱんにされたがな。

? だがこれで大体事情は掴めた。

「大方、会長選挙に落ちた腹いせに黒神を襲撃でもする気なのだろう。」

「それで黒神の強さを知っているあいつは善吉を勧誘でもしたのだから。」

「だが善吉がそんな勧誘に乗るわけがない。」

「昔からあいつは、」

「俺はね、めだかちゃんを守る奴になりたいんですよ。」

「善吉が男を蹴り飛ばす。」

「全く、どこに行っても変わらないな善吉は。」

「残った奴らが武器を手に取り善吉を囲む。」

「それではこれより一身上の都合に基づき、生徒会を執行する！
！」

「じゃあない、あいつからの頼みもあるしな。」

「つたく、本当に世話が焼ける。」

「俺は善吉に後ろから殴りかかるうとしていた奴の腕を掴む。」

「後ろから襲い掛かるのは卑怯だろ。」

「俺の登場にその場の全員が驚く。」

「つ、剣！？」

「わざわざ要らん事に首を突っ込むなよ善吉。」

「俺は腕を掴んでいた奴を壁に投げつける。」

「仕方ないから俺も手伝ってやるよ。」

「え？でもお前には・・・。」

「関係ないとか言うなよ？俺はお前や黒神に協力すると前にも言っただろ。」

「で、でもよ。」

「でももへつたくれもない。文句なら後でいくらでも聞いてやる。」

「俺は善吉の側に立ち、落ちていた木刀を手取る。」

？「サツサとやるぞ」

？「はあ、わかったよ」

？そして、俺達はその場にいた全員をボコボコにした。

？「フン、弱すぎる。これなら日向1人でもいけるぞ」

？俺は木刀を投げ捨てる。

？「お前本当にノーマルなのか？」

？「それはこっちのセリフだ」

？全く持つてその通りだ。

？善吉も俺も戦闘力はスペシャルにも引けをとらない。

？このタッグなら余程の化物やイレギュラーでない限り負ける事はないだろう。

？「ありがとう、剣。でもお前がいなくても俺は大丈夫だったぞ？」

？「そんな事はわかってる。だがな、俺は約束は必ず守る。お前とは協力すると約束した。だから助けた。それだけさ」

？それにあいつとも・・・

？「そつか・・・これから宜しく頼む、剣」

？「まあ、程々に任されてやるよ」

？そして俺達は握手を交わした。

？その後、善吉と別れ、男達が再びよからぬことを考えぬ様に念入りにOHANASIIしたのは別のお話である。

五限目 刀神

?生徒会襲撃作戦を阻止してから数日が経った。

?俺は今日も校舎をウロウロしていた。

?帰ってもする事がないのだから仕方ないだろう。

?部活に入るのも面倒くさいから嫌だ。

?そんな訳で(どんな訳だよ!)俺は何か暇潰しになる様な事はな
いかと考えていると、

?「グシャ!バキッ!ドカツ!」

?何かとんでもない効果音が聞こえて来た。

?何処からかと、そちらに目を向けると柔道場があった。

?俺が中を覗くと、

?「うわあ...」

?思わず引いてしまった。

?中には死体、もといグロッキー状態の柔道部員達と、その惨劇を
生み出したであろう犯人。

?生徒会長“黒神めだか”がいた。

?「ん?」

?黒神は俺の気配に気付き、

?「そんな所で見ていてもつまらぬだろう。貴様も入って来るが
いい。風神同級生」

?あいつは何で直ぐに俺の気配がわかるんだろう?

?「相も変わらず偉そうだな、黒神」

?俺は柔道場に入る。

?そこには無事だった柔道部員達や未だグロッキーの者達、そして、

? “反則王” 『^{ナベシマ}鍋島 ^{ネコミ}猫美』

？ “柔道界のプリンス” 『アクネ 阿久根 コウキ 高貴』

？ 現柔道界最強の2人がいた。

？ 「部活中にお邪魔します、鍋島先輩」

？ 「ええよ、ええよ。あんたも黒神ちゃんの友達やろ。別にうちは構わんから好きなだけ居てええで。それにあんたには興味があるし」
？ はい？

？ 「興味とは？」

？ 「とぼけんなや。あんた相当強いやろ。それもとびつきりに」

？ まさか一目で見抜くとは・・・

？ 「いえいえ、貴女ほどではありませんよ。反則王」

？ 「ふふ、まあそういう事にしとくわ」

？ どうしてこうもこの学園には化物級がわんさかいるんだよ。

？ 多分、この人も俺の気配に気付いてたんだろっしな。

？ などと考えていると善吉と阿久根先輩が柔道対決をする事になっていた。

？ なんでもどちらが生徒会（黒神）に相応しいかを決めるらしい。

？ てかあの2人、未だに仲悪いのか。

？ 「善吉、お前マジであいつと柔道で勝負する気か？」

？ 俺は試合前の善吉の元へ行く。

？ 「剣！？ お前なんでこんな所に？」

？ 「そんな事は後にしろ。それよりも、阿久根先輩と柔道で試合なんてお前じゃ勝ち目ねえぞ」

？ 単純な戦闘なら善吉にも勝ち目はあるんだろうがな。

？ 阿久根先輩も随分と丸くなったみたいだし。

？ 「そんな事は百も承知だ。でも阿久根先輩が10本取るまでにこちらが1本取れば勝ちなんだから勝機はあるさ」

？ ふむ、なるほど。

？ 「それなら相手に9本取られた時が勝負だぞ。それまでにどれだ

け相手の体力を削って尚且つ隙を作る事が必須になるがな」

？「つつかそれぐらいしか勝つ手段ねえだろ。」

？「わかった。まあ、めだかちゃんの番犬として精々頑張るさ」

？そして、番犬とプリンスの試合が始まる。

？俺は黒神と鍋島先輩と共に試合を観戦する。

？「で、君はこの試合どう見る？風神クン」

？「そうですね。まあ普通に考えれば善吉に勝ち目はないでしょう。単純戦闘なら露知らず、柔道ならば経験の差が圧倒的すぎますから」

？「ナルホド、ナルホド」

？「そもそも、普通＜ノーマル＞と特別＜スペシャル＞。この才能＜スペック＞の差は埋めようのない差ですから」

？「ウチも同意見やわ。君とはなんや話しが合いそうやん。柔道部に入らへん？」

？「丁重にお断りしますよ。俺の本業は別にありますから」

？「へえ。なんや気になるなあ」

？「お見せする程のモノでもありませんよ。所詮は普通＜ノーマル＞の域を出ないモノですから」

？などと話していると今まで沈黙していた黒神が、

？「・・・どうやら随分、天才が嫌いなようだな鍋島三年生、風神同級生」

？「うん、嫌いやで。大嫌いや。黒神ちゃんのこと阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじりたあて、ウチは柔道やつとんのよ」

？「なるほど。さすが柔道界の反則王は言うことが違う。それでは風神同級生は？」

？「別に。俺は天才が嫌いなわけじゃない。人間はそれぞれ全員違う。それこそ同じ人間なんかいない。だがそれはいけない事じゃない。それは個性であって全ての人間の持つ魅力だと思っている。そこは鍋島先輩と違う所だな」

？「なるほど。やはり貴様も一味違うな」
？「クククッ」

？「ここからは原作と同じなのでといたします」

？そして善吉が先に9本取られてしまった。
？「つてあれ、なんか凄く時間がすぎた気が？」
？まあ、いいや。
？「やはりこうなったか。ならばここからが正念場だな」
？だが善吉にそこまでの体力と気力が残っているかが不安だな。
？阿久根先輩も随分と疲れてはいるがそれでも無傷の状態だからな。
？すると、黒神がユラリと立ち上がる。

？ここから善吉が頑張れるかは前次第だぞ、黒神

？「善吉！いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるな
とは言わん」

？ならばどうすればいいか？

？それは・・・

？「だから勝つて！！貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ、困
るぞ、泣いちゃうぞ！」

？でたよ・・・黒神めだかの真骨頂その2「ツンデレ」

？鍋島先輩も阿久根先輩も驚いているというか引いているというか
・

？だがこれは・・・チャンスだ。
？「そこだ。善吉」

？善吉は倒れそうになるが、

？「お前が泣くとこんなか見たことねえし、見たくもねえよ！！」

？阿久根先輩に双手刈りを決め、勝利した。

？まあ、反則くさいが黒神に目を向けた阿久根先輩が悪いんだから文句はあるまい。

？生徒会２人の勝利つてとこかな。

？「それじゃ、俺はこれで失礼します」

？「ん？もう帰るんか？」

？「はい。自分は部外者ですし、特に用があるわけでもありませんから」

？「なら阿久根クンと試合しいや」

？「へ？」

？「阿久根クーン。疲れとる所悪いけどここの風神クンと試合してもらつてええか？」

？「僕は構いませんが」

？「ほな早速試合や。誰か風神クンに柔道着貸したつて」

？「いや、だから俺は試合をする気は・・・」

？「頑張れよ剣！」

？「うむ、貴様のお手並みを拝見させて貰おう」

？「だから俺の話を聞けよ！？」

？そして、気付けば俺は柔道着を着せられ、阿久根先輩と向き合っていた。

？「何故こうなった・・・」

？俺は溜め息混じりに呟く。

？「よろしくね。たしか、風神くんって言ったっけ？」

？「はい。まさか柔道界のプリンスとやる事になるとは思いませんでしたよ」

？「まあ、気構えずに気楽にやろうよ」

？「いえ、やるからには本気でやりましょう。俺も少しは柔道をかじってますから」

？「へえ。じゃあ、お互いいい試合にしようね」

？「こちらこそ、よろしく願いします」

？俺達は握手を交わす。

？「鍋島三年生、何故風神同級生と阿久根二年生を？」

？「ん？そんなん風神クンに興味があるからに決まっとるやん」

？「しかし、本業が剣道である奴と阿久根二年生をぶつけるとは．．

」

？「え？彼剣道が本業なん？なら何で剣道部やないん？」

？「それは知りません。しかし、奴と阿久根二年生をぶつけるのは無茶というモノでしょう」

？「そうやね。ちょっとかじった程度で阿久根クンと試合すんのは無茶やな」

？「いえ、そうではありません。今の阿久根二年生を風神同級生とぶつけるのが無茶だと言っているのです」

？「え？それって．．」

？「試合始め！」

？「それじゃあ、僕も疲れているし一瞬で決めさせて貰うよ」

？阿久根先輩が俺に向かって来る。

？「失策ですね。阿久根先輩」

？俺は阿久根先輩の襟と腕を取る。

？「風神同級生は中学時代、剣道界では有名でした」

？？そして、一気に自分の方へ阿久根先輩を引き寄せ、

？「風神同級生は中学時代、剣道において全国大会個人戦初出場にして初優勝し、その後中学3年間、その中学最強の座を誰にも渡しませんでした」

？阿久根先輩の懐に入り込み、

？「奴は若干10歳で既に免許皆伝というあり得ない強さを持っていました。故に風神同級生はこう呼ばれています・・・」

そして一気に阿久根先輩の軸足を足の裏で蹴り上げる。

？「なっ！？」

？阿久根先輩が完全にバランスを失う。

？「トゥジン 刀神」と

？一本背負いの容量で畳に叩きつける。

？「ダアアアン！！」

？その場のほぼ全員が言葉を失う。

？もつといえは黒神以外が。

？「審判、判定を」

？「は！？い、一本！それまで！」

？審判の判定が下る。

？「大丈夫ですか？」

？俺が手を差し向けるが、

？「いや、今は立てそうにないよ。軽い脳震盪を起こしてるみたいだ」

？「モロに決まっちゃいましたからね。まあそれだけ話せるなら大丈夫でしょう」

？柔道対決は俺に軍配が上がった。

？「ま、まさか阿久根くんが負けるなんて・・・」

？「ふむ、今は“山嵐”か。かじった程度で出来る技ではないな。私にもできる」

？「あんなんウチにもできんで。むしろプロでも出来る奴はそうおらん」

？「だから言っただの。善吉との試合で体力を消耗した阿久根二年生と奴をぶつけるのは無茶だと」

？「“刀神”か・・・噂には聞いた事があつたけど風神くんがそうとは思わへんかったわ」

？「というよりあいつ絶対、普通くノーマルじゃねえだろ」

？「お前が言うな、善吉」

？俺も話しに参加する。

？「剣、阿久根先輩は？」

？「まだ起き上がれそうにないよ。まあ、あの技は受け身を取るのがほぼ不可能な技だからな」

？てか、話せる方がおかしいんだよ。

？なんせ投げられながらも抜け出そうとしてたからなあ。

？完璧には決まっていなかった。

？万全の状態の阿久根先輩であれば勝つのは不可能だっただろう。

？「それより自分、ほんまに柔道部に入らへん？」

？「入りません」

？鍋島先輩の誘いを軽く躲す。

？「それより風神同級生、何処であんな技を覚えた？」

？「ああ、あれは昔俺の知り合いがやってるのを見て覚えたんだ」

？「見て覚えたって・・・そんなレベルの技やないで」

？「昔から真似をするのが得意なんだよ」

？そんな感じで質問攻めにされそうだったので俺はそそくさと逃げようにしてその場を後にした。

? I Side 黒神I

? ふむ、やはり奴は興味深いな。

? 剣道の實力は言うまでもないであろうし、柔道もあれ程とは．．．
? しかし、どんなに調べても奴がどの中学に通っていたかが分からぬ。

? 他の全校生徒の事ならば粗方わかるが．．．

? まあ、いずれわかる時が来るであろう。

? I Side Outer

? 今日も疲れたなあ。

? まあ、良い暇潰しにはなったかな。

? でもそろそろ理事長も俺に目を付け始めただろうなあ。

? まあ、俺には精々この日々が崩れない様に頑張る事しかできないけどな。

? まったく、あいつも面倒な役を押し付けてくれたものだな。

? そして翌日、阿久根先輩が生徒会書記に入ったがそれはまた別の話し。

五限目 刀神（後書き）

やっと一巻の話しが終わりました。

やっぱ、小説の掛け持ちはキツイです。

でも粉骨碎身の思いで頑張るのでこれからもよろしくお願いします

六限目 相入れない存在

? 放課後、今日も今日とて俺は校内を徘徊していた。
? 最近はいろんな事があった。

? 部活動対抗水中運動会。

? あれは大変だった。

? 俺はもしもの時のレスキューとして参加していた。

? まあ、部活にも入ってない俺としては良い暇潰しだった。

? それにしても部費が3倍と聞いた時の殺気だった生徒達の戦いは凄まじかった。

? 怪我人が出なかったのがせめてもの救いというものだったろう。

? 俺も足がつった女生徒を1人救った程度の仕事しかなかったので高みの見物ができた。

? その後は生徒会が劣勢かと思ったが逆転し、優勝かと思われた。

? しかし所がどっこい、最後の最後で反則王こと鍋島先輩が良いところ取りで優勝した。

? その後は、何故か手錠で繋がった黒神、善吉、風紀委員を見かけたりと色々あった。

? 最近は加速的に色々な事が起きている。

? これも生徒会が随分と定着して来た証拠だろう。

? 特に目立った事件があるわけでもないし、平和な日々が続いている。

? しかし、これが嵐の前の静けさの気がしてならない。

? 今まで学園を守り続けた日之影前会長が退き、あの人を覚えてい

る者も恐らく俺以外では数える程度もいるかどうかも怪しい。

？日之影前会長が守り続けた平和を守っているのが現生徒会、そして『風紀委員会』。

？たしか風紀委員会の風紀委員長は生徒会を良く思っていないかった筈だ。

？そろそろ何かしかけて来てもおかしくはないだろう。

？まあ、そんな事を今考えた所でどうし様もないだろう。

？俺は俺に出来る事をするでしょう。

？と、そこで珍しい3人組を見かける。

？生徒会長“黒神 めだか”

？理事長の孫にして善吉の親友“不知火 半袖”

？風紀委員会“鬼瀬 針金くオニガセ ハリガネ”

？の、3人である。

？「何処に行くんだ？」

？俺は興味本位で三人をつける事にした。

？3人が向かう先はどうやら音楽室らしい。

？音楽室といえば、防音設備にガタが来ていて、吹奏楽部の大音量と合間って苦情が殺到しているらしい。

？黒神は目安箱に投書があった為防音設備の補強と練習時間の折り合わせの交渉に向かうらしい。

？不知火は偶々出くわしただけ。

？鬼瀬は先に音楽室に行っている風紀委員長にタオルを届けるらしい。

？そして、音楽室に到着した俺達に待ち受けていたのは・・・

？「「「！」「」」」

？1人の少年と圧倒的な蹂躪が行われた惨状だった。

？『雲仙 冥利くウンゼン ミヨウリ』

？10歳の若さで箱庭学園“風紀委員長”となった彼こそ“2年13組”に所属する異常くアブノーマル>の1人である。

？やりすぎる正義を掲げ、見下し性悪説を掲げている。

？黒神の正反対の信念を持つと同時に、この学園を守り続けている。

？今現在、この学園が平和なのは、日之影前会長と黒神、そして風紀委員長“雲仙冥利”の働きに他ならないだろう。

？それにしても流石は雲仙先輩だ。

？言葉に置いて黒神に一步も引かないとは。

？それにしてもあの攻撃方法はスーパースーパーボールか。

？俺の目を持ってしてもあれを完璧に避けるのは骨が折れそうだ（まあ、所詮は子供騙しだがな）。

？どうやら雲仙先輩は生徒会メンバーに刺客を送った様だ。

？風紀委員会が生徒会を襲撃って…やってる事は完全に悪もんだがまあいいや。

？生徒会メンバーを助けようと音楽室から出ようとする黒神にスーパースーパーボールを放つ雲仙先輩。

？「後輩イジメはそれくらいにしたらどうです？雲仙先輩」

？俺は黒神と雲仙先輩の間に入り全てのスーパースーパーボールを弾き返す。

？「「「「「！？」」」」」

？予想外の乱入に驚く4人。

？「誰だデメー！？」

？「初めまして雲仙先輩。1年1組所属、風神剣です。以後お見知りおきを」

？「風神同級生、何故ここに？」

？「話しは後だ。ここは俺に任せてさっさと行け」

？「…わかった。礼は必ずする」

？猛ダツシュで去って行く黒神。

？この場に残っているのは俺、雲仙、不知火、鬼瀬のみ。

？「テメー、そこをどきな」

？「あんなカツコつけた事言った後でホイホイと通すわけがないでしょう」

？「ケツ、1年しかも1組の人間が2人で俺を止められるとも思ってたのか？」

？雲仙先輩が俺達を脅す。

？しかし10歳の脅しで動じる俺達ではない。

？「止められるさ。なあ、不知火」

？「全く持ってその通りだね、風神」

？「雲仙先輩は風紀委員長だからな」

？「校則違反してない生徒には手エ出さないんでしょ？」

？「…！…チッ」

？悔しそうな表情をする雲仙先輩。

？「それに貴方の種は既に知れていますからね。例え戦闘になっても簡単にはやられませんよ」

？「…テメー本当に普通<ノーマル>か？」

？「さあ、貴方のご想像にお任せしますよ。俺は否定も肯定もしませんから」

？「…しゃあねえ。こうなったらバケモン女がどうするか高みの見物と行くか」

？雲仙先輩は扉の突破を諦める。

？どんなに残忍であろうと雲仙先輩は風紀委員長なのだ。

？「にしても俺の攻撃を全部弾いたのはテメーが初めてだな」

？「それはそうですよ。だって風神はあの“刀神”ですから」
？「「なっ！？」」

？雲仙先輩と鬼瀬が驚愕の表情を浮かべる。

？「テメーがああ“刀神”だと！？」

？「私でもその名前は聞いた事がありますよ！」

？「へえ、それは光栄ですね。まさか雲仙先輩までこの名を知っていたとは。てか何で不知火はそれを知ってたんだ？」

？「人吉から聞いたんだよ」

？「成る程」

？あのおしゃべりめ。

？「それでは“モンスターチャイルド”こと雲仙先輩。…俺をどう見ます？」

？「異常くアブノーマル？それもとびっきりのな」

？「何故そう思うのですか？」

？「あの数の俺のスーパーボールを全て弾く、いや、正確には弾いたボールで他のボールも弾いたのか。そんな芸当俺以外に出来る筈がねえ。ましてや普通くノーマル？なら尚更だ」

？「買い被りすぎですよ。俺は人より目が少し良くて、人の真似をするのが得意なだけの普通の生徒ですよ」

？「ケツ、ちよつと目が良い程度の奴に俺のスーパーボールが攻略されんなら俺は風紀委員長になんぞなれてねえ」

？雲仙先輩がスーパーボールを指の間に挟む形で8個構える。

？「あれ？まさか風紀委員長が校則違反していない生徒に攻撃するおつもりですか？」

？「委員長！それは流石にマズイですよ！！」

？「問題ねえよ鬼瀬ちゃん。これは只の子供のお遊びだからよ」

？「で、ですが」

？鬼瀬が慌てる。

？まあ、風紀委員長自らが生徒に手を上げたなどとしたら風紀委員会の存続に関わるだろうからな。

？「わかりました。暇潰しには丁度良さそうですし。それにこの学園の平和を守って来た風紀委員長殿の力も見てみたいですね」
？「ヘッ、後悔してもしらねえぞ？」

？一触即発。

？しかしその時、

？「プルルルルルル」

？雲仙先輩の携帯電話から着信音が鳴り響く。

？「……」

？一気に俺達の間冷えた空気が漂う。

？「チッ、興が醒めちまった」

？電話を取る雲仙先輩。

？「それではまたの機会という事で」

？俺もその場は引く事にした。

？それから暫く雲仙先輩は電話の相手と話した後、

？「グシャッ」

？携帯を握り潰した。

？その後、雲仙先輩は音楽室の壁を破壊して、風紀委員全員に帰宅する様に言い残し去って行った。

？その顔に獣が如き表情を浮かべて…

？雲仙先輩が去って行った音楽室では、

？「ねえ風神。風紀委員長の事止めなくていいの？」

？「こつからはあいつの戦いだからな。もしもの事がない限り俺は手を出さんさ」

？だが…もしあいつが…黒神があの状態になれば俺も出た方がいいだろう。

？あれは雲仙先輩じゃあ手に追えんだろうからな。

？「そんじゃあ、俺も行くとするか。不知火はどうする」

？「私はいいや。バケモノ同士の戦いなんて見ても仕方ないし」

？不知火がどこからか出して来たパンを食べながら言う。

？「そうかい。あ、もしも俺の事を報告すんなら好きな様に報告してくれたんでいいぜ」

？俺は後ろ手に手を振りながらその場を後にした。

六限目 相入れない存在（後書き）

なんだか随分と飛ばし飛ばしの話しになってしまいました
次回はついに黒神の乱神モード。

そして始まるサーティンパーティー篇。

剣はどの様に切り抜けるのか。

そもそも介入するのだろうか。

次回をお楽しみに。

七限目 剣の心

?俺は取り敢えず生徒会室へと向かった。

?そして、ドアに手を掛けた瞬間、

?「ドオオオオオオンンン!!!」

?大爆発が起こり、俺は間一髪で吹き飛んで来た扉を避ける。

?「ギリギリセーフだったな。だが黒神達は...」

?俺が生徒会室を覗けばそこにはほぼ無傷の生徒会メンバーに雲仙先輩がいた。

?成る程、雲仙先輩の着ているあれが『白虎<スノーホワイト>か。ダンプにはねられても問題ないという代物らしいがどうやら本当の様だな。

?あれ程の爆発でも耐えられるというのは驚きだな。

?しかし一方の黒神達と言うと、

?見た所全員無事のようにだ。

?恐らくは黒神が3人を庇ったのだろう。

?あれ程の爆発をともに受けて立っていられるんだからたいしたもんだよ。

?まあ、中学時代のあいつならもっと早く傷が治っていたであろうがな。

?だが、そんな事は後にしよう。

?今のあいつのアレは間違いない。

?あれは...

?黒神めだかの真骨頂その4

？「私は貴様を許さない！！」

？『乱神モード』

？ああなれば最後、あいつは目の前の敵を倒すまで止まらない。

？引き金は雲仙先輩が善吉達を巻き込んだ事か。

？全く余計な事をしてくれたぜ。

？あいつに頼まれた以上、最悪の場合俺が止めなきゃなんねえのに。

？「はあ、憂鬱だ。面倒な事この上ない」

？俺が溜息をついていると、雲仙先輩が黒神の一撃で吹き飛び校舎に叩きつけられる。

？「相変わらずえげつねえ威力してやがる」

？流石に10歳の少年にあれ以上はキツイだろう。

？人間を拳で吹き飛ばす。

？それ自体半端な威力じゃできないのに黒神は10メートル近く吹き飛ばしている。

？まったく殺す気かよ。

？あれでも力が衰えてんだから規格外だ。

？その後、雲仙先輩はもう一度黒神の一撃を喰らう。

？「ん？今のはわざとに見えたが、何か作戦でもあるのか？」

？校舎内に吹き飛んだ雲仙先輩と追撃を行う黒神。

？「ん？黒神が突然動かなくなったな。あれは．．．鋼糸か」

？成る程、黒神の動きを封じる為にわざわざ攻撃を喰らったわけだ。

？「まあ、普通ならこれで雲仙先輩の勝ちで決まど。しかし．．．」

？校舎に地響きが響き渡る。

？「これで終わらないのが黒神めだかが黒神めだかたる所以だ」

？地響きび正体。

？それは黒神が校舎を鋼糸ごと引っ張っている事による揺れだった。

？「私は生徒会長だぞ！学園校舎のひとつやふたつ、動かせんわけがなかるうが！！」

？いやいや、どういう道理だよ。

？しかし、雲仙先輩も読み違えたもんだな。

？黒神は聖者でも化物でもない。

？あいつは生徒会長だ。

？黒神が動けなくなった雲仙先輩の元へ近寄る。

？「これ以上は流石に不味いな」

？黒神が雲仙先輩へ止めを刺しに掛かる。

？振り下ろされる拳。

？「やめろめだかちゃん、やり過ぎだ」

？「これ以上やるんなら俺が相手になるぞ？」

？俺、善吉、阿久根先輩、喜界島の四人で止める。

？「・・・・・・・・・・離せ貴様達。巻き込まれたいのか」

？「うん、そうだよ。あたし達は黒神さんに巻き込まれたいんだ！」

？喜界島・・・

？「めだかさんになんと言われようと、俺達は生徒会を辞めません」

？阿久根先輩・・・

？「お前が目指す生徒会長は、お前の夢は、こんなものではないだろっ」

？「・・・・・・・・・・めだかちゃん」

？善吉・・・

？「俺達はもう二度と、お前をひとりにはしないよ」

？俺達の言葉に黒神の乱神モードが解ける。

？もう大丈夫だな。

？俺は全ての鋼糸を持っていたナイフで切り裂く。

？なんでナイフを持ってたかって？

？たまたまだよ。

？「こういう事態を想定してただけさ。」

？「じゃあ、何で鋼糸をナイフなんかで切れたのだった？」

？「それは俺が刀神だからさ。」

？「まあ、全てはご都合主義ってことさ。」

？「すまん、風神同級生」

？「ふん、そう思うんなら面倒掛けさせんなよ」

？「まったく、この校舎どうすんだよ。」

？「てか、怪我人出てねえだろうな。」

？「しかしまあ、今回あそこまで精神が乱れた黒神が一瞬で戻ったのはきっと……」

？「俺は善吉に目を向ける。」

？「雲仙二年生」

？「黒神が今だ動けない雲仙先輩に歩み寄る。」

？「貴様、生徒会に入らないか？」

？「「「「「！？」」「」「」」

？「雲仙先輩だけでなく、生徒会三人組も驚く。」

？「まあ、当然だ。」

？先程まで死合いの如く戦っていた本人を勧誘するなんて普通はできない。

？「．．．．つ、ざっけんな！」

？雲仙先輩が激怒する。

？「オレは風紀委員長だぞ！？誰とでも仲良くできると思ってんじやねーよボケ！！」

？「．．．．．そうか、残念だ。だが私はこれからも、誰とでも仲良くできると思い続けるよ」

？その信念を持ち続けたが故に、お前はあれだけ傷ついたというのに．．．

？「今回は確かにやり過ぎた。すまなかったな、雲仙二年生。私が悪かったよ」

？本当にやり過ぎだよ。

？お前は毎度毎度．．．

？「貴様には己の未熟さを学ばせてもらった。これからもご指導ご鞭撻のほどをお願いするぞ！」

？そして、最後は敵に感謝しお礼を言う。

？まったく、これだからお前は黒神めだかでいられるんだな。

？「では貴様はどうだ？風神同級生」

？「何がだ？」

？「貴様が生徒会の副会長にならぬか？」

？「は？」

？何言つてんだこいつは・・・

？「もとより私は副会長の座には私に敵対的な者に就いてほしかったのだ。貴様は私達に協力的だが、己の信念に反したことは絶対にしない男だ。実力も十分過ぎるほどだし、貴様なら文句なしだ」

？まったく、本当にこいつはどうしようもない馬鹿だ・・・

？「ぷつ、あはははははは！！」

？俺は我慢できずに笑ってしまった。

？「つ、剣？」

？「あははは！！ああ、ごめんごめん。本当にお前らは相変わらずだと思つてな」

？「え？」

？「阿久根先輩は昔から絶対に自分の決めた事は曲げない。中学時代はそれで少し間違つた道を進んだ様ですけど」

？「な、何故それを！？」

？「善吉は中学時代から何一つ変わってない。

？お前は昔から黒神の横でずっとこいつを守り、信じ続けている。

？それは特別＜スペシャル＞でも、異常＜アブノーマル＞でも、ましてや普通＜ノーマル＞では不可能だ。

？それでもお前はこいつの側にいて、こいつを支え続けている」

？「剣、お前は・・・」

？「黒神、お前は本当の大馬鹿だ。

？敵も味方も関係なく、お前は世界中の人間全てが大好きだってんだからな。

？もうどうしようもねえよ。

？善吉の苦勞を察するぜ？

？中学時代にあれだけの事がありながら変わらないんだからな。

？あいつの頼みじゃなきゃ俺だってお前を見捨ててもおかしくはなかったんだぞ？」

？「風神同級生・・・貴様は・・・」

？「貴様は私達を・・・あいつとの事を知っているのか？」

？それに答えるのはまだ早い・・・

？「さあな。俺が言える事はお前らはそのままでいろってことだけ

さ。

？俺はお前達を可能な限り協力してやるからさ」

？俺はもう駄目だからな・・・

？俺は黒神達に背を向ける。

「じゃあな、黒神。その怪我直せよ」

？「待て!!」

？俺の肩に黒神が触れる直前に俺は・・・

？「消えた!」?

？俺はその場を去った・・・

？日之影先輩の真似をしてみたが思った以上に上手くいったな。
？これで直接会わない限りあいつらは今日の事を思い出せないだろう。

？でもこれは問題の先延ばしにしかないんだよね・・・

？なんで話してしまったんだろう・・・

？俺もやっぱ俺を理解してくれる存在を望んでるって事か・・・

？「はっ！笑わせるぜ・・・」

八限目 刀神vs英雄

？黒神と雲仙先輩の戦いから数日、俺は日之影先輩の異常を使い続けている。

ちなみに今日まで学校をサボっていた。

？「ハア・・・どのタイミングで解除しよう・・・」

？俺は日之影先輩の異常を解除するタイミングを失い、途方にくれていた。

？「でもこれを解くとあいつらに何を聞かれるか・・・」

？俺も解っている。

？これは話さなくてもいいことくらい。

？これを話しても俺の時間は帰って来ず、あいつらの日々には何の関係もない。

？だから、話さなくてもいいことなんだ。

？俺は自分にそう言い聞かせる。

？それでも、俺の心はきつと違う事を考えているんだろうが・・・

？「あ、風神みつけ」

？俺が振り返ればそこには不知火がいた。

？「・・・よく俺に気付いたな」

？「ニシシシ、たまたまだよ」

？「ふん、たまたまで見つけられる様な異常じゃねえだろうが、これは」

？そう、この異常はこの学園を人知れず守り続けた英雄が使ってた能力なのだから。

？「それを使えるあんたは相当な化物だけどね」

？「俺は人の真似が得意なだけの贋作者に過ぎんさ」

？そう、俺は所詮は偽物だ。

？本当の自分を隠した道化でしかない。

？俺と不知火の探り合いの会話が続く。

？しかし、

？「よお、風神」

？突然かかってくる声。

？この声は・・・

？俺と不知火が振り返ればそこには・・・

？「日之影先輩・・・」

？元英雄がいた・・・

？「久し振りだな。ちゃんと俺の事覚えてるか？」

？やはりこの人には気付かれたか・・・

？「勿論です。今日はどんな様子でしょうか？」

？俺は日之影先輩と対峙する。

？「言わなくてもわかるだろう？お前は危険過ぎる。この学園にとっても、黒神達にとってもな」

？・・・そうかも知れない、それでも・・・

？「それで？元会長の日之影先輩はその危険過ぎる風神をどうする気ですか？」

？不知火が以前変わらず日之影先輩に問う。

？「俺は風神、お前を倒す。この学園の為に」

？日之影先輩から圧倒的な力を感じる。

？「ふん、随分と傲慢ですね。俺がこの学園に何をしたわけでもないのに」

？誰になんと言われ様と．．．

？「なんとも言え。俺がお前を倒す事実には変わりはない」

？何があつても．．．

？「どうすんの風神？いくらあんたでも日之影先輩の相手はキツインじゃないの？」

？「確かに日之影先輩は強い。それこそ軍隊にも匹敵するだろう。しかし、俺だつて一対一での敗北は一度のみ。日之影先輩相手だろうと引けは取らない」

？俺は二度と負けられない。

？あいつらの為に．．．

？「武器の無いお前が俺に勝てると思うのか？」

？日之影先輩が構える。

？「この俺『知られざる英雄くミスターアンノウン』日之影空洞に！！」

？日之影先輩が拳を放つ。

？俺は紙一重で躲す。

？「はつきり言えば、肉弾戦において貴方に勝てる存在はいないでしょう。それは俺だつて例外ではない。まあ、刀か竹刀を持っていれば別ですが」

？丸腰で日之影先輩に勝てる可能性があるのはそれこそ黒神くらい
のものだ。

？「それで、お前はどのような気だ？このまま俺に大人しく倒される
か？」

？「まさか。たしかに丸腰の俺では貴方には勝てません。しかし、
負ける事はありませんよ」

？「ぬかせ！！」

？日之影先輩が再び俺に向かってくる。

？「不知火！！下がってろ！！」

？俺が不知火の方を振り向く

？しかし、そこには不知火の影も形もなかった。

？ええゝ．．．いくら自分の事じゃないとはいえこの状況で帰るか？

？考えらんねえよ．．．

？俺は視線を戻す。

？日之影先輩が連続で拳を放つ。

？それは暴風とも形容できるような猛攻。

？しかし、それでも俺にはかすりもしない。

？「何故当たらない！？」

？「まだわかりませんか？それが俺の異常だからですよ」

？「何！？」

？「あらゆるモノの0.2秒先が見える目。それが俺の異常『未来視<リーディング>』です」

？『未来視<リーディング>』

？この異常は先天的なモノでなく後天的なモノだ。

？俺があらゆる武術の修行をし、研鑽を積み、手に入れた能力だ。

？相手の目や微妙な筋肉の動きなどの情報から相手の動きを予測する。

？「どんな攻撃も当たらなければ意味はありませんよ」

？「成る程。あらゆる戦闘に対応できる万能な能力、というわけか」

？俺は日之影先輩の動きを読み、カウンターを行い顔面を殴り飛ばす。

？しかし、日之影先輩は少しのけぞる程度でしかない。

？「だが俺にはさほどのダメージは与えられない。だから俺には勝てないが負けはないと言ったのか」

？日之影先輩があらゆる攻撃を放つ。

？しかし、俺はことごとくそれを躲す。

？「俺は負けられない！！この学園の為に！！」

？「俺だって・・・俺にだって負けられない理由がある！！」

刀神<俺>と英雄<日之影空洞>の戦いの火蓋はこうして切られた。

？戦いは丸一日続いた・・・

？

九限目 決着

？「ハア．．．ハア．．．どんな体してんだよこの馬鹿英雄は．．．」

？「うるせえ．．．お前も俺にカウンター何千発決めたと思ってやがる．．．」

？俺達は誰も使わなくなつた旧校舎．．．の残骸の前で2人して横たわっている。

？「あんだけ殴つても気絶一つしないなんてどんな体してるんですか」

？「お前だつて丸一日殴りかかつて全部避けるなんてどんな集中力だよ」

？俺と日之影先輩の戦いはお互いの体力切れで幕を閉じた。

？「一日中、集中力を持続させながら殴り続けてやっと引き分けなんてわりに合いませんよ」

？「俺なんか武器を持ってないお前と自分の土俵で戦つて引き分けたぞ？お前本当に何者だ？」

？「俺は．．．」

？「．．．．．．．．．」

？「俺は一年一組所属、風神 剣ですよ。それ以上でもそれ以下でもありません」

？「そうか．．．」

？日之影先輩は立ち上がり今だ立てない俺の近くまでくると、

？「すまなかった」

？土下座をした。

？「え？」

？「お前と戦ってよくわかった。お前の信念は本物で信用に足る人物だという事も。お前の事を何も知らずに、ただ危険だという理由で俺はお前をこの学園から追い出そうとした。先輩失格だ」

？「ですがそれは．．．」

？「どんな力も使い手次第だ。良くも悪くもな。お前がまだ隠してる能力の事は俺にはわからん」

？「やっぱまだ手の内を隠してるのに気付いたか。」

？「まあ、説明したのはおれの異常だけだしな。」

？「だが、お前なら間違った事には使わないと今回の戦いで良く解った」

？「しかし、もしかしたら俺がこの学園に牙を向けるかもしれせんよ？」

？俺の言葉に日之影先輩は微笑を浮かべる。

？「そんな質問する奴がそんな事をできるわけがないだろ？それに
．．」

？「それに？」

？「もしそうなくても俺のする事は変わらんさ」

？これがこの学園を守り続けた英雄．．

？「それはごめんこうむりたいですね。貴方と戦うのは二度とごめ
んです」

？「そうか？俺はまたやってみたいが」

？「ただ戦闘好きくバトルジャンキー＞なんだよ、この人．．

？と、そこで．．

？「シシシシ」随分派手にやったね」

？俺達が振り向けばそこには不知火がいた。

？「不知火．．お前どこ行ってたんだ？」

？「ん？理事長室だよ。巻き込まれたらたまったもんじゃないから
さ」

？「そうかい．．．」

？本当に自由奔放って言葉を体現した様な奴だな。

？「でも風神にはビックリだよ。まさか日之影先輩と素手でやりあ
って引き分けるとはね」

？「これも修行の賜物だよ」

？そつえば．．．

？「黒神達どうしてる？もう先輩の異常は解除したから思い出した
筈だけ」

？まあ、全開で“未来視”を発動してて他の異常の持続をさせるな
んて器用な真似はできない。

？ましてや丸一日なんて。

？「ああ。生徒会の連中なら今頃地下でフラスコ計画を潰してるよ
っ」

？「な！？」

？「フラスコ計画だと！？」

？「あれ？日之影先輩は別として、何で風神が知ってんの？」

？「授業サボってた間にこの学園のスーパーコンピュータにハッキ
ングしたんだよ」

？「でも凄い厳しいセキュリティがあつたでしょ」

？「ああ。でも、ハッキングが得意な異常の真似をしたら簡単にアクセスできたさ」

？「それをさらつと出来るのはお前くらいだぞ？」

？日之影先輩にツッコまれた。

？『フラスコ計画』

？簡単に言えば「天才がなぜ天才なのか」を解明し人為的に天才を創り出す計画だ。

？全校生徒を実験台として・・・

？そしてこのフラスコ計画の要こそ十三組の異常の中でもとびつきの十三人を選びすぐった『十三組の十三人<サーティン・パーティー>』だ。

？俺や日之影先輩程の化物級はないと思うが、もしそんなのがいれば黒神が乱神モードになっても勝てるかどうか・・・

？「くそっ！こんなことしてる場合じゃねえ。急いで応援に行かないと・・・」

？しかし、俺の思いに反し、体は思う様に動かない。

？「やめとけ。俺と丸一日戦ったんだ。体力も精神もう限界が近いだろ」

？「それでも俺は行かなくてはならないんですよ」

？それに、なんだかとても嫌な予感がする・・・

？「俺が変わりに行ってやろうか？」

？「それは駄目でしょう？もうこの学園の為に貴方の協力を求めるわけにはいきませんよ」

？これからの学園は黒神達が守らなければならないんだ。

？そして、俺はあいつらを支えなければならないんだ。

？約束したから・・・

？「不知火・・・今あいつら何階だ？」

？「うーんとね・・・たぶん高千穂先輩の所だからまだ地下一階だよ」

？まだ時間はあるか・・・

？「なら俺はここで体力の回復を待つ」

？今俺にできるのはちょっとでも体力を回復させて、もしもの時に対応できる様にしておくことくらいだ。

？「そつか。おじいちゃんに風神を呼んで来いって頼まれたんだけど無理っぽいね」

？「ああ。後日にしてくれって頼んどいてくれ」

？まあ、行かないと思うけど。

？「了解。じゃあ又ね」

？その場を去ろうとする不知火。

？「あ、待ってくれ不知火」

？「何？」

？不知火が振り返る。

？「もう一つ、ついでに頼まれてくれないか？」

？今俺にできることは・・・

？俺の頼みを聞き、不知火は今度こそ去って行った。

？「じゃ、俺も教室に戻るか」

？「日之影先輩」

？「何だ？」

？「日之影先輩はフラスコ計画を黒神達が潰せなかったらどうする気ですか？」

？この学園を守り続けた英雄の言葉は・・・

？「フツ、そんな事は決まっている」

？日之影先輩は俺に背を向ける。

？「俺は英雄だ。今も昔もな」

？その言葉には絶対の自信と信頼が籠もっていた。

？そして、日之影先輩の姿が消える。

？「敵わないなあ」

？最後までかつこよかったな。

？「じゃ、俺は一眠りするか。一応に手は打ったし、何かあったら不知火に連絡してくれるように頼んだし」

？俺はそのまま地面に転がって目を閉じた・・・

？刀神は眠る、来たるべき時の為に・・・

十限目 最強の助っ人

? 眠りについてた俺を目覚めさせたのは無機質な電子音だった。

? 「プルルルルル」

? 「ん? まだ30分しか眠ってないんだが・・・」

? 俺は電話の相手を確認する。

? 携帯電話を確認すればそこに表示された名前は、

? 『喜界島 もがな』

? 俺は善吉から生徒会全員の番号を聞いている。

? 生徒会も全員、善吉から聞いている筈である。

? 「喜界島か? 何があつた」

? 「風・・・み・・・ん!・・・助・・・て!・・・このま・・・じゃ・・・みんな・・・やら・・・黒か・・・んを・・・ガシャ!・・・ツーツーツー」

? 携帯電話の破壊音が最後に聞こえ、喜界島との通信が途切れる。

? 「喜界島!？」

? まずい。

? これは緊急事態が起こったという事だ。

? 最後の破壊音は『十三人』の誰かによるものだろう。

? 「くそっ!!」

? 俺は回復しきっていない体に鞭を打って、地下への入口がある時計台へと向かった。

? 一步で10メートル近く飛び、建物を飛び越える。

? 骨が軋み、筋肉が断裂する。

? それでも、俺は速度を上げ続ける。

? その速度はまさに疾風迅雷。

? 1キロはあった距離を1分で駆け抜けた。

? 俺は迷うことなくそのまま地下えの入口に突入する。

? そこでは12人が一進一退の攻防を行っていた。

? 俺は飛び交う銃弾や超躍弾を『リーディング未来視』を使ってかわして、馴染みの顔の人物達の所へ向かう。

? 「鍋島先輩!! 雲仙先輩!! 鬼瀬!!」

? この3人こそが俺が念の為に打った策だ。

? 不知火に頼んで呼んでおいて貰ったのだ。

? 「風神クン!?! なんで君がここにおるん?」

? 「そんなことより、黒神達はどこです!!」

? 「あいつらなら今頃地下で残り4人の『パーティ十三人』と最終決戦と決め込んでるだろうぜ」

？見渡せばハッキングした時に見た9人もの『十三人』がいた。

？「その3人は味方と考えていいのでしょうか？」

？そこには3人の異常がいた。

？うち2人は『十三人』の中でも武闘派の2人である。

？『十三組の十三人』最強『高千穂 仕種』
タカチホ シグサ

？ハードラッピング
験体名『棘毛布』

？異常性『オートパイロット反射神経』

？暗器使い『ムナカタ ケイ宗像形』

？験体名『ラストカーベット枯れた樹海』

？異常性『殺人衝動』

？もう1人は・・・

？「俺の姉ちゃんだよ」

？ああ、成る程。

？確かにそっくりだ。

？まあ、味方が多いに越した事はない。

？「エレベータでサッサと応援に行きたいが．．．」

？俺はチラリと目線を直通エレベータの方へ移す。

？そこでは2人の『十三人』が侵入を防いでいた。

？「いちいち相手をする時間もないか．．．」

？俺は目線を下に移す。

？「宗像先輩！刀を一本お借りします」

？俺は地面に落ちていた刀を手取る。

？「君がどこの誰で、何をする気かは知らないけど好きにはさせないよ」

？瞬間、俺に向かって大量の髪が襲い掛かる。

？「この異常は．．．」
アブノーマル

？俺はこの能力の持ち主へと目を向ける。

？『チクゼン 筑前 ユトリ 優鳥』

？験体名『髪々の黄昏（トリック オア トリートメント）』

？『十三組の十三人』の中でも別格の異常性を持つ六人『裏の六人』
の1人だ。フラスシックス

？生きている様に自由自在に動く髪の毛は俺の動きを封じに掛かる。

？しかし・・・

？「刀を持った俺を貴様如きが止められると思うなよ」

？その髪の毛は俺に触れる前に一本残らず細切れになる。

？「なっ！？一体何をしたの！！」

？驚愕する筑前先輩。

？「たいした事じゃありません。ただ単純に斬り刻んだだけですよ
？筑前先輩」

？単純に『未来視』リーディングで髪の毛の動きを読み、超神速の居合をもって
斬り裂いた。

？ただそれだけのことだ。

？まあ、女性の髪の毛を斬るのは抵抗があるが、すぐに伸びるのだ
から許してもらおう。

？「それがテメーの真の力って事か？」

？「今更何を言ってるんですか？雲仙先輩。俺の偉名は『刀神』ですよ？そりゃあ、刀を持てば強くなるに決まってるじゃないですか」

？そう、今の俺は『刀神』。

？それは最強の剣士の称号。

？今の俺とまともに戦って勝てる存在などいない。

？「ケツ！やっぱり普通ノーマルじゃなかったじゃねえか」

？「すいません。あの時はまだ異常と知られなかったので・・・」

「

？だが、今はそれよりも・・・

？「雲仙先輩、俺は善吉達の所へ急ぎます」

？階段を探す時間はない。

？『シックス六人』の相手も同様だ。

？ならば・・・

？俺は刀を構え、

？「妙技“鏢鳴り”」

？チン・・・

？微かな金属音、そして・・・

？「ドオオオオオオオンンン！」

？俺の周りに円形の線が入り、地面が抜ける。

？「風神クン、今何したん．．．」

？「居合切りで地面を斬っただけですよ」

？そう、ただの居合。

？しかしその圧倒的速度故に刀の抜刀は見えず、刃の納刀の時に発する鏝鳴りの音しか聴こえない。

？故に『妙技“鏝鳴り”』

？「それじゃあ、後はお任せします」

？俺は穴の中へ飛び込む。

？「間に合ってくれよ」

？俺はそのまま地面を斬り裂きながら地下へと降りていった。

？後に残された者達は．．．

？高「あいつは一体．．．」

？雲「ああ、オメーら知らねーのか。なら教えてやるよ。あいつはあの日本最強の剣士『刀神』だよ」

？しかし、この戦いの決着は予想外の、それも最悪の形でつく事となることをまだ誰も知らない。

十一限目 刀神降り立つ

? 剣が喜界島からの連絡を受ける数分前、善吉達は地下12階へと辿り着くがそこには1人の『十三人^{パーティ}』がいた。

? 『^{ユクハシ}行橋 ^{ミソウ}未造』

? 彼の策略により善吉、阿久根は催眠ガスにより眠らされてしまう。
? しかし、喜界島は息を止める事でそれを防いでいた。

I Side 喜界島I

? どうしよう。

? 人吉も阿久根先輩も眠らされちゃった。

? 私がなんとかしなくちゃ。

? ...そうだ!!

? 私は携帯電話を取り出す。

? 掛ける相手は私の同級生で人吉の親友。

? 彼とは殆ど話した事はない。

? 私が彼と初めて会ったのは水中運動会の時だった。

? 私は不覚にも足がつってしまった。

? その私に誰よりも早く気づき誰よりも速く私を助けてくれた彼。

? きつと彼なら...

? 「喜界島か? 何があった」

？「風神君！！助けて！このままじゃみんなやられちゃう！黒神さんを助け「何をしてるんだい？」っ！？」

？しまった！？

？I Side Out

？―第三者視点―

？助けを呼ぼうとする喜界島。

？しかし、助けを呼ぶのを行橋が黙って見ている筈もなく、喜界島の電話は破壊されてしまう。

？その後、行橋の『受信感度』を逆手に取った喜界島により行橋と喜界島はダブルノックアウトとなる。

？しかし、そこに現れたのは最後の『十三人』。

？「行橋よ、こっ酷くやられた様だな？」

『ミヤノジョウオウト
都城 王土』であった。

？その男が現れただけで辺りは静けさに包まれる。

？まるで世界から全ての音が消えてしまったが如く。

？「跪け」

？その一言はまさに絶対的な言霊。

？それはまるで王の言葉であるかの様に。

？喜界島は自らの意思と関係なくその場に跪く。

？都城王土の真骨頂その1

？『言葉の重み』

？王の圧政には誰も逆らえず抗えない。

？更には喜界島の周りにあった瓦礫が突如動き出す。

？それは念動力や魔術の類いであるかの如く、喜界島の上空に佇む。
？そして、瓦礫は彼女へと降り注ぐ。

？しかし、瓦礫は一瞬にして唯のゴミ屑になる。

？それは降り注ぐ前に細切れにされてしまったが故に。

？彼女のそばには1人の男が佇む。

？「ふう、ぎりぎり間に合ったな」

？ここに神の名を冠する者が降り立つ。

? I Side Out

? 俺は床を斬り裂き穴を開けながら最下層を目指す。

? 道中にはいろんな階層があったがそれは置いておこう。

? そして、俺が地下十二階へと辿り着いた時に見たものは、喜界島へと瓦礫が降り注がれる瞬間だった。

? 俺は自分の足が限界に近いのも気にせず、バネの如く跳躍する。

? そして、喜界島と瓦礫の間に滑り込み、

? 「奥義“百花繚乱”」

? 全ての残骸を全方位への斬撃により、1つ残らず斬り裂く。

? 全ての残骸は細切れにされ、俺と喜界島に当たる事はなかった。

? 「ふう、ぎりぎり間に合ったな」

? 俺は喜界島を確認する。

? 見れば身体中に傷があった。

? 恐らく周りに散らばっている硝子の破片によるものだろう。

? 「大丈夫か? 喜界島」

? 「う、うん」

？「まったく、女の子がこんなに傷ついてんのに男共は何してやがる」

？と、俺が周りを確認すると、善吉と阿久根先輩は眠っていた。

？ブチッ！！

？これを見た瞬間、俺の中で溜まっていたものが爆発した。

？俺は2人の側へとゆっくり近づき、

？「さつさと起きやがれ！！」

？2人の腹を思いつきり踏んでやる。

？「ゲフツ！！！！？」

？2人は突然の衝撃に飛び起きる。

？「ゴホッゴホッ・・・一体何が・・・」

？「つて、剣！？」

？「なに2人して寝てやがる。喜界島なんてこんなにボロボロになつて頑張ってるつてのに」

？「い、いやそれはだな・・・」

？「言い訳無用だ。2人共そこに座れ」

？「え？でも今はそれどころじゃあ・・・」

？「黙れ。まったくお前らがいつまでもそんなだからあいつにお前らの事を任されたんだぞ。まったく、俺はお前らの保護者かってんだ。俺だって面倒臭いがあいつには借りがあるから受けてるんだ。まあ、一方的にだがお前らとは知らない仲間でもないからな、この学園にわざわざ普通ノーマルになりふして入学したんだ。十三組になつて理事長に目を付けられたくもなかったしな。今となつてはもう無駄だな。そもそもだなー」

？所々にちよつとネタバレな発言をしながら2人に日頃のストレスをぶつけつつ説教を行った。

？10分後、

？「あ、あの風神くん、それぐらいにしてあげたら？」

？「え？」

？喜界島の言葉に我に帰った俺。

？見渡せば周りには状況についていけなといった様子の『十三人』が四人と、目が死んでいる黒神と、変態こと黒神の兄である黒神真黒さんがいた。

？「あれ？真黒さんいたんですか？」

？「始めからね・・・」

？溜息混じりに呟く真黒さん。

？「あれ？君は僕の事を知ってるのかい？」

？真黒さんが疑問の声をあげる。

？「ええ。まあ、今の貴方はもう知らないでしょうけど」

？まあ、黒神達と同じなのでどうとも思わないがな。

？「それよりも・・・」

？俺の目線の先にはその目を濁らせ、変わり果てた黒神。

？「なんだ、黒神？その府抜けた目は」

？しかし、黒神は俺の言葉など意にもかえさない様子で、

？「貴方が何を言っているのかはわかりませんが訂正します。私は黒神めだかではありません。私は『黒神めだか<改>』です」

？その言葉に俺や真黒さんを含め、生徒会メンバーは一瞬言葉を失う。

？「これはあなた方の仕業ですか？都城先輩、名瀬先輩」

？まあ、聞くまでもないだろうがな。

？「確かにこの王^{おれ}が洗脳した。それがどうかしたか？」

？当然の如く返された言葉。

？「いえ、都城さん。洗脳ではありません」

？黒神が反論する。

？「私は洗脳などされていません。ただ目が醒めただけです」

？止める・・・

？「見知らぬ他人の役に立つため生まれてきたという悪夢のような妄想から私は十三年ぶりに醒めました」

？それはもはや黒神めだかの言葉ではなかった。

？「・・・おい、黒神」

？「なんです？風神くん」

？俺はその場の誰もが反応できない程のスピードで黒神の懷に踏み込み、刀の刃を首下に添える。

？「・・・・・・・・」

？「何ですか？」

？それは何の疑問もないような言葉だった。

？これがいつもの黒神ならば、斬られる理由がないから避ける理由もないと言っただろうが、今のこいつは違う。

？こいつは俺のスピードに反応する事も出来ていなかった。

？以前の黒神ならばギリギリ反応出来た筈のスピードであるにも関

わらず。

？以前の黒神ならば反応出来て尚、認識した上で避けなかった筈なのに．．．

？「下らねえ．．．」

？俺は静かに刀を納める。

？「斬らないのですか？」

？黒神がさも当然の様に聞いてくる。

？「そんな価値が今のお前にあるのか？」

？それは侮蔑の言葉ですらない。

？ただ当然の事の様に。

？只々、冷たく、興味を失った様に．．．

？俺は柱に背を預けて腕を組む。

？「俺はもう手を出さん。後はお前らで決着を着けな」

？全員が静まり帰ってしまふ。

？しかし、生徒会メンバーは諦めない。

？変わり果てて尚、黒神を救おうとする。

？そして、黒神めだかく改へと向かって行く。

？「跪きなさい」

？黒神は都城先輩の『言葉の重み』を使用し、3人をはひれ伏す。

？「ふむ、やはりしつくりきますね。やはりあのような人格など、あのような心など異常性には余計だったのですね」

？3人を見下す黒神。

？「重い荷物を降ろしたような、全裸になったような清々しい気分ですよ」

？そこには、かつての黒神はいない。

？「それはどうかな、めだかちゃん」

？黒神の言葉を遮る真黒さん。

？それはこれ以上こんな黒神の言葉を聞きたくなかったからか。

？「……………めだかちゃんではありません。めだかちゃん（改）です。その声はお兄様ですね——どこに隠れておいでですか？」

？「どこだっていいだろう？そんなことよりめだかちゃん。お前は荷物を降ろせてなんていないよ」

？「……………何を言っているのです、お兄様。私の中に既に心は欠片も残っていません。私は心なき人です」

？「そうかい。だったらどうしてお前は、泣いているのかな」

？「え」

？黒神の瞳から一筋の雫が零れる。

？それは一筋の希望でもある。

？それはまだ黒神の心が死んでいない事を表している。

？それはそうだ。

？人格をリセットする事なんてできる筈がない。

？例え心が忘れても体は覚えている。

？今まで黒神が歩んだ道を、そこにはいつも支えてくれた存在がいたことを。

？あの十三年前の思い出がある限り、黒神めだかは消えない。

？そして、今の黒神から前の黒神を引っ張り出せる存在はこの世でただ1人。

？黒神と共に同じ道を今も昔も、そしてこれからも歩み続けるであろう男。

？「俺は異常性おまえを倒して、無印の黒神めだかを取り戻す!!」

？人吉善吉のみである。

十一限目 刀神降り立つ（後書き）

？『ユクハシ行橋ミゾウ未造』

？ラビットラビリンス験体名『狭き門』

？異常性『受信感度』

？『ミヤコノジョウオウド都城王土』

？クリエイト験体名『創帝』

？異常性『人心支配』

？簡単に言えば、行橋先輩の受信の異常に対しての送信の異常。
？先程の浮いていた瓦礫や言葉の重みの正体である。

？『ナゼ名瀬ヨウカ天歌』

？ブラックホワイ験体名『黒い包帯』

？異常性『改造』『禁欲さ（ストイック）』

？本名『黒神 くじら』

？黒神めだかの姉にして黒神真黒の妹である。

？『クロカミ黒神 マクロ真黒』

？黒神めだかの兄。

？全ての女子を妹と呼び、小学生までなら男子まで妹と呼ぶ、アブノーマル異常にして変態。

？しかし、異常『解析』を有しており、マネージメントの天才にして魔法使いとまで呼ばれる程のトレーナーでもある。

指摘があつたので、この様にキャラクター紹介を後書きに書いてみました。

意見やご感想があれば教えて下さい。

反論がなければこれからはこの様に書いて行こうと思います。

十二限目 目醒める神

? 善吉と黒神めだか（改）の戦いが始まる。

? 2人の壮絶な蹴り合い。

? もはやあの2人を止めることは不可能だ。

? 決着が着くまでは。

? しかし、黒神の動きがどことなくぎこちない。

? それはやはり、心のどこかで黒神が善吉への攻撃を手加減しているからだろう。

? 黒神は宗像先輩の暗器の能力をもつて、名瀬先輩の注射器スキルを善吉へ向けて飛ばす。

? そうだ、黒神は昔から教えればなんでもできる奴だった。

? だが、俺は勿論、真黒さんも含めて黒神に、何かを教えてあげられる奴なんていなかった――

? ただ1人を除いて・・・

? なーんだ。

? 興味を失ったなんて言っても、やっぱり俺はあいつらの事を気に

してるじゃないか。

？ははは、やっぱり俺はあいつらの友達でいたいんだろうなあ。

？よし、手を出さないなんて言っただけだが、俺も善吉に手助けをするとうか。

？ばれないだろうけど、まあ、ばれたらその時はその時か。

？俺は都城先輩の異常性『人心支配』の能力を利用して、黒神に過去を思い出させる様に仕向ける。

？後はお前次第だ、頑張れよ善吉――

？黒神へと善吉の蹴りが当たり始める。

？まるでわざと当たったかの様に。

？更には黒神の攻撃は先程までの激しさを失う。

？善吉は蹴りを黒神の顔に当てる直前で止める。

？「……………いい加減にしろよめえ！ふざけてんのか！さっきからなんで俺の蹴りを避けねえ！？」

？善吉の言葉に黒神は、

？「……………あなたから」

？ゆっくりと口を開ける黒神。

？「あなたから攻撃を受ける理由がありません。ゆえに、避ける理由がありません」

？その言葉はまさしく黒神めだかの言葉だった。

？その瞳からまるで決壊したダムのように涙を流す黒神。

？思い出したんだな。

？十三年前のあの日、黒神めだかの生き方が決まった瞬間。

？まだ幼かった、1人の少年の一言、

？『きつときみは、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ！』

？それは幼い少年の何気ない一言。

？しかしそれは、黒神めだかという存在の生き方を決定づけた言葉。

？俺はこれで何とかなると思った。

？これがきっかけで黒神が戻って来ると思った。

？しかし、そんな甘い考えは一瞬で崩れ去る。

？黒神は自身に着いていた拘束具を無理やり外し、善吉の顎を撃ち抜く。

？倒れ伏す善吉。

？そして、黒神は善吉に馬乗りとなり首を締め付ける。

？真黒さんも表情を一変させ絶望した表情となる。

？「風神君！！2人を助けて！！風神君なら・・・」

？喜界島が俺の元へ駆け寄る。

？「悪いけどそれはできないよ」

？「どうして!？」

？ここで俺が手を貸せば善吉を救う事は出来る。

？しかし、それは根本的な解決にはならない。

？「俺は信じてる。あの2人の絆は洗脳なんかで切れてしまうものじゃないと」

？黒神は頭を抱える様にする。

？その瞬間、黒神の頭から眩い光が放たれる。

？その場の全員がなにが起こっているのかがわからない。

？俺は行橋先輩の異常の真似をし、黒神の考えを読み取る。

？「なっ!？」

？俺は黒神の考えを読み取り驚愕する。

？「な・・・なんだあれ・・・?電火・・・!？」

？名瀬先輩も突然の事態に困惑する。

？「否！ボクにはわかるんだからねーあれは」

？行橋先輩も気づいたようだな。

？「電磁波だ」

？俺は行橋先輩に続くように言葉を繋ぐ。

？「どういう事だ？」

？名瀬先輩がどういふことが聞いてくる。

？「あいつは自分で自分を洗脳し直すつもりだ。都城先輩にされたように。電磁波を脳に直接放射して。そうですね？行橋先輩」

？「うん。その通りだよ」

？「・・・確かに、『言葉の重み』が使えたならば電磁波による洗脳も可能だろうがーしかしそれはあくまで理屈だ！」

？「洗脳には過度な繊細さが必要なんだ。それをあんな乱暴に力づくでなんて・・・感電死とは言わねーけどよ、あのままじゃ頭空っぽになっちまうぜ！」

？念の為に確認を取ったがこの3人が言うなら間違いないだろう。

？「止める、黒神！！それ以上はお前の脳が持たない！！」

？俺は黒神を止めようとするが、

？「やめろ」

？善吉が黒神の両腕を押さえて止める。

？それはそうか。

？一番近くにいるお前が黙ってる筈がないよな。

？黒神は洗脳されても自分を犠牲にするところは変わっていない。

？そんな黒神を黙って見てるお前じゃないよな。

「みんなを幸せにするためには、まずはお前が幸せにならなきゃな」

？善吉が黒神を抱き締める。

？黒神はゆつくりと目を閉じ再び開く。

？その目には以前と同じ、それ以上の光を灯して。

？「おい、黒神。1つ質問だ。お前は何のために生まれてきたんだ？」

？俺の質問に黒神は、

？「むろん、見知らぬ他人の役に立つため、」

？その腕には会長と副会長の腕章。

？「みんなと一緒に！私も幸せになる！！」

？ここに、生徒会長『黒神 めだか』は復活する

十三限目 最後の『十三人』（前書き）

更新遅くてすみません。

十三限目 最後の『十三人』

？俺達は最終決戦の舞台、地下十三階へと向かっていた。

？そこはフラスコ計画の中枢が眠っている。

？そこへと向かう階段の途中、

？「そういえば、キミはどうしてさっき黒神がやろうとしてる事に気づいたんだい？」

？行橋先輩から突然の質問。

？「そついや俺も気になってたんだよな」

？名瀬先輩も続く。

？「というより、君は誰だい？」

？今更な事を真黒さんに聞かれた。

？「お兄様は気づいておられなかったのですか？」

？「え？めだかちゃんは知ってるの？」

？「ええ。風神同級生は我々の同級生で善吉のクラスメートですよ」

？「おいおい冗談だろ？こいつが普通^{ノーマル}とでもいうつもりか？どう考えても異常^{アブノーマル}だろ」

？「こいつはあの『刀神』ですよ、お姉さま」

？「「「「「！？」」「」「」」

？驚愕する、「十三人」4人と真黒さん。

？てか、みんな反応一緒だな。

？「こいつがあの・・・」

？「どうりで僕の『解析』でも読み取れないわけだ」

？え？俺ってそこまでの規格外になってたの？

？「そう、日本最強の剣士ですよ」

？「別に俺にそんなつもりはないんだけどなあ」

？「そう謙遜するでない。貴様にはそれだけの实力がある。先程も私が戻る様に後押ししてくれていたのだろう？」

？「・・・何の事かわからないな」

？え？やっぱばれてたの？

？「私も受信と送信の異常が使えるのだぞ？わからないわけがあるまい」

？いや、善吉とあんな壮絶な戦いしてたら普通そんな事気づかないだろ？

?・・普通じゃありませんでしたね。

?「それにしても、風神君が天井から出て来た時はビックリしたよ」

?「ん?まあ、直通エレベーターが使えなかったからな。床を斬って降りたほうが早かったんだよ」

?「やっぱ黒神さんと同じで風神君もめちゃくちゃだね」

?「・・・・・・・・・・・・・・・・」

?その喜界島の言葉に若干傷ついた俺だった。

?「それで?なんで行橋先輩の異常を使えたんだ?」

?・・そんな話もしてましたね。

?「別になんのことはないですよ?ただ単に俺は人の真似が得意っただけですよ。俺の異常は『リーディング未来視』ですから」

?そつだ。

?俺の異常はあくまでもこの目だけだ。

?「『未来視』?」

?「見たモノの0.2秒先が見える能力ですよ」

？「成る程。その能力で音楽室で雲仙二年生の超躍弾スーパードールを防いだのか」

？まあ、アレぐらいなら使わなくても何とかなっただろうけど。

？「ハン！そんな能力、戦闘じゃほぼ無敵じゃねえか。でも、それなら黒神も出来るんじゃないのか？」

？「いえ、お姉さま。どうやらこの能力は他の異常とは少し違う様です」

？まあ、後天的な異常というのもあるんだろうが・・・

？「これは俺が長年の修行で得た武の境地でもあるんだ。おいそれと簡単に出来てたまるか」

？もしできたら俺は立ち直れる自信はないぞ。

？そんな感じで話していると、どうやら十二階へと着いたようだ。

？扉が開かれると放たれる膨大な冷氣。

？目の前には大量の機材。

？「さぶっ！冷房効かせ過ぎだろ」

？「無理もないさ善吉。ここでは24時間365日、休むことなく

13万1313台ものスーパーコンピュータが並列に稼働し続けているんだからな。これぐらいで冷却してないとコンピュータが熱暴走を起こしてしまうのさ」

？それにしてもこれだけのスーパーコンピュータを集めるとは．．．
？この計画がどれだけの規模のものがうかがえるな。

？「やっぱりこの階は以前と変わっていない様だね」

？そついや真黒さんは元フラスコ計画統轄だったな。
？今は行方不明だった妹の名瀬先輩＜黒神くじら＞が統轄をやっているなんてなんと皮肉なんだろうね．．．

？「そして、このコンピュータを全て操っているのが．．．」

？送信の異常を持つ都城先輩というわけか。

？まあ、所詮戦闘タイプではない都城先輩では黒神の足下にも及ばない。

？なんせ『十三人』最強の高千穂先輩にも勝ったんだからな。

？まあ、それぐらいは出来てもらわないと困るがな。

？あいつとの約束の為に。

？来るべき再会の為に。

？「ん？」

？俺は上を見上げる。

？そこにあるのは天井のみ。

？しかし、その向こう側に何かを感じる。

？この感じはまさか・・・

？その時だった。

？都城先輩の腕が古賀先輩の胸を後ろから貫いていたのは。

？？「対象者の心臓ハートに直接！電磁波を送り相互干渉することで、対象者から電気信号デジタルの周波数を強制的に取り立てる。行橋風に名付けてみるなら都城王土の真骨頂その？『理不尽な重税』だ」

？倒れそうになる古賀先輩をギリギリ抱きとめるが出血が酷い。

？クソッ・・・！！俺が目を逸らさなければ・・・！！

？「真黒さん！！名瀬先輩！！手伝って下さい！！応急処置をします！！」

？「古賀ちゃん・・・古賀ちゃん・・・」

？放心状態となる名瀬先輩。

？「しっかりして下さい！！名瀬先輩！！」

？「風神・・・」

？ゆっくりとこちらに顔を向ける名瀬先輩。

？「大丈夫だよ、くじらちゃん。僕の解析とお前の改造があればきつと助けられる」

？そうだ、人体に関する異常でこれ以上のものはない。

？「俺も貴方方の真似をすればお2人のスキルを使えます。この3人で救えないはありますがありません」

？「僕達のスキルを．．．君は一体．．．」

？「それは後です。道具は上の階で取って来ましたから問題ありません」

？俺は必要な道具を身体中から取り出す。

？これは宗像先輩の暗器のスキルを使ったものだ。

？道具はおそらく名瀬先輩の物だろう。

？ここに来るまでに念の為拾っておいて良かった。

？そして、三人による治療が始まる。

（その後は原作と同じ流れです）

？全てが片付き、俺は十三階の中枢コンピュータにウィルスを仕込む。

？このウィルスは指定した事柄に関するあらゆるデータを消去する俺が作った極悪ウィルスだ。

？そんじょそこらのワクチンでは破壊できず、全てのデータを消去したら自動的に消滅し痕跡は残らないというものだ。

？消去するのはフラスコ計画に関する全てのデータ。

？この程度であのチート野郎の計画を崩せるとは思わながちよつとは時間を稼げるだろう。

？その後、俺達は地上までの直通エレベーターに乗り（黒神がパスワードを入力した。流石の俺にもあのパスワードはわからなかった）地上へと帰って行く。

？「ん？そういえば何か忘れてるような気がする・・・」

？忘れちゃいけない何かを・・・

？「おっと！そういえば都城三年生、あと一回だけー」言葉の重みを使ってもらっぞ

？「ん？」

？「一階で戦っている連中を制圧するためにだ。貴様も知っているだろうが、雲仙二年生は途中で戦いをやめるようなタイプではないのでな」

？「・・・ああ、そうだな。『裏の六人』も止めてやらねばならんし。よかるう、普通なる俺が承ったよ」

？「うむ、よろしく頼むー」

？そして、開かれたエレベーターの扉の先では、

？「！？」

？『裏の六人』と雲仙先輩を始めとする六人（先程、善吉からこのチームの名前が『チーム負け犬』だと聞かされた）が全員血まみれとなっていた。

？身体中に螺子を刺されて。

？こんな事ができるのは俺の知る限りただ一人。

？最弱にして最狂の過負荷^{マイナス}、過去に黒神が唯一改心させる事ができなかった男。

？「『めだかちゃん、久し振りっ』『僕だよ』」

？『球磨川 楔^{クマガワミソキ}』が悠然と現れた。

？ついに再開した最強と最弱。

？戦いの時は近い・・・

十三限目 最後の『十三人』（後書き）

ついに終わったフラスコ計画篇。

しかも、丁度十三話で終わるといふプチミラクル（作者は何一つ考えずに書いております）。

そして始まる生徒会戦拳。

しゅじんこはどの様にかかわっていくのか、それは次回のお楽しみ。

十四限目 再開する最強と最弱

？この世にはただ１人、黒神めだかが改心させられなかった人間がいる。

？その人物の名は『球磨川楔』

？最弱にして最凶にして最恐の男。

？俺が一目を置き、その能力はあらゆる存在の脅威となる。

？同時に、俺の過去を知る数少ない人物の１人でもある。

？球磨川楔は生徒会メンバー、真黒さんに奇抜な挨拶をかまして行く。

？「『君も久し振りだねっ』『剣ちゃん』」

？お次は俺に挨拶か。

？「・・・お久し振りです、球磨川先輩」

？この人は以前よりも更に劣化したって感じだな。

？「貴方程の方がこの学園に転校なんて何が目的ですか？」

？「『君は何でだと思っ？』『剣ちゃん』」

？「分かりませんね。今も昔も俺には貴方の考えていることは分かりません。ただ1つ言える事は」

？俺は黒神達よりも一歩まえに出る。

「貴方がこいつらに手を出そうと言うなら、俺も黙ってません」

？「『随分と冷たいな』『めだかちゃんといい、君といい』『久しぶりの再開なんだから、もっといろいろ喋ろうよ』」

？「そんな機会はいくらでもあるでしょう。俺としてはそこに転がってる人達の治療のほうに優先ですので」

？「『そっか』『それじゃあ、仕方が無い』『優しいね、剣ちゃん』は』『じゃあ、また今度話そうね』『剣ちゃん』」

？そうして、球磨川楔は去って行った。

？ふう、本当に相変わらずの人だ。

？いや、劣化という意味では変わっているのかな。

？今の球磨川先輩なら挨拶で人の心を壊せるだろうな。

？全く、未恐ろしい人だ。

？それにしても、一体なぜここに球磨川先輩が・・・・・・・・

？あいつが呼んだのか？

？・・・・いや、それはないか。

？あいつはしっかり球磨川先輩に封じ込められてる筈。

？まともにスキルを使うのもままならないだろう。

？だからあいつは俺に球磨川先輩の事を頼んだのだから。

？俺は思考の海に落ちそうになるが、

？「おい、貴様！！」

？黒神が俺の胸倉を掴む。

？「何だよ、黒神」

？黒神は鬼の様な形相で・・・・てか、改神モードになりながら俺を睨みつける。

？「貴様、奴とはどんな関係だ！！以前、貴様は私達の間であつた事を知っているかの様な口振りだった！！だが、我々は貴様を知らん！！貴様の過去を以前調べたが、剣道における記録ぐらいしかわからなかった！貴様は何者だ！！私達の味方か！！それとも・・・・

」

？俺は黒神から視線を反らす。

？反らさずにはいらなかった。

？「ああ、そうだよな。俺を怪しむのは当然だ」

？「そうだ、俺達はもうあの時には戻れない。」

？「そんな事はとうの昔に覚悟している。」

？「それをわかっていながら俺はこの道を選んだのだから。」

？「すると、突然黒神は俺の胸倉から手を離す。」

？「どうしたんだ？」

？「馬鹿者が・・・そんな表情をしている者をこれ以上責められるのか」

？「どうやら俺は相当情けない顔をしているのだろう。」

？「俺は背を向ける黒神に向けて、」

？「信じられないことは分かっている。俺だってお前達にはいろんな事を隠してるんだ。それで信じて貰おうとは思わない。でも、1つだけ言わせてくれ」

？「これは俺の心からの言葉。」

？「俺はお前達を友達だと思っている。だから俺はお前達の仲間でいさせて欲しい」

？「それだけは分かってほしかった。」

？「もう何も残されていない俺に残ったただ1つの約束の為に。」

？「それだけ残して俺は『知られざる英雄』を発動し、その場を後に」

した。

？俺は時計台の外に出てから携帯電話を手取る。

？「プルルル、プルルル、ガチャ。もしもし？」

？「赤先輩ですか？1年の風神です」

？俺が電話を掛けたのは2年11組所属の“保険委員長”
『^{オキ}黄』先輩だ。
『^{アカ}赤
^ア青

？「で？今日は何の用？私も忙しいのだけど」

？ちなみに俺は各委員会への電話番号を入手している。

？もしもの時にこういった情報が役に立つのだ。

？「すみません。では、手短に。実はカクカクシカジカで。重傷者が多数なので、至急、時計塔に保険委員会を派遣して下さい」

？俺の説明に赤先輩は、

？「そう。先輩を馬鹿にしてるとしか思えない説明だけと言いたい事はわかったわ。直ぐにうちの部員を向かわせる。それから後日、貴方は私の“爪”で引っ搔いてあげるから保健室に来なさい」

？それだけ残して赤先輩は電話を切る。

？うーん、流石にふざけ過ぎたか。

？暫くは怪我しても保健室に行くのは止めよ。

? はあ、それにしても疲れた。

? それに全身ボロボロだ。

? こりゃあ、筋肉痛がヤバそうだ。

? 全く、日之影先輩には今度何か奢って貰わないとな。

? うーん・・・ジャンプ1年分とか？

? とまあ、下らない思考はここまでだ。

? ついに球磨川先輩がここに来たってことは決戦の日も近いだろう。

? ここからは俺とあいつとの契約を果たさないと。

? 随分な無理難題だがやるだけやってみっか。

? そして俺は帰路につく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2871o/>

とある学園の異常者達

2011年9月9日16時24分発行